

## 令和7年度 第2回酒田市社会教育委員の会議【概要】

日 時	令和7年11月6日(木)午後1時30分～3時
場 所	総合文化センター412号室
出席者	委員10名(欠席2名) 事務局 酒田市教育長、教育次長、社会教育課長ほか5名

(概要)

### ◆教育長あいさつ

学校ではインフルエンザが流行っているので、注意したい。

川南地区の学校統合については、本日夜、第1回統合準備委員会を開催する。地域の方、PTAの方、学校関係者など約70名から参加いただく。これまで場所について話し合いを重ねてきただが、これからは開校に向けて、どんな学校をつくっていくか、皆さんのお意見をききながら進めていきたい。社会教育関係では、地域の行事をどうしていくか、話し合っていきたい。学校づくりについては、皆さんと目的や目標を共有して連携、協働して、酒田型スクール・コミュニティを意識しながら進めていきたい。

本日は、2つの計画についてご意見をいただき、より良い計画にしていきたい。

### ◆協議

#### (1)酒田市生涯学習推進計画について

##### ○委員

国や県の計画ではそれぞれコンセプトを出しているが、本市では地域課題解決のため独自性を出していく必要がある。地域人材の育成が「主な施策」へ格上げされたことは良かったと思う。この会議で、郷土愛を育てることで若者定着を目指すことも社会教育の役割だと教えていただいた。地域人材とは全世代と受け止めているが、本市の課題は若者定着だと思うので、そういうキーワードを入れてもよいと思う。商工港湾課など他課との関係もあり数値目標が難しいかもしれないが、社会教育の講座回数などでもいい。若者定着を折り込んでほしい。

##### ○社会教育課長

子どもたちが地域の自然や文化を体験する機会が減っていて、地域への愛着が薄れしていくことを心配している。また、地域活動を推進するリーダーやコーディネートする人材の確保も課題である。地域の人と子どもとが関わる機会を提供していきたい。コミ振の方々は、地域活動の推進の重要なポジションにいるので、研修や情報交換の場を設けたい。

##### ○委員

第7節に「子どもたち」とあり、中学生、高校生までを指すと思ったが、説明をきいて小学生までのようなので、了解した。

##### ○座長

庄内地方は、若者の県外流出率が高い。特に女性は戻ってこない。18歳までに、戻ってくるよう

なきっかけづくりが必要だ。故郷に戻ってきて活躍したいと思う人を育てる必要だ。来年から公益大学に国際学部ができて、優秀な学生が入ってくる。その学生たちが地元で活躍できるようなフォローも必要だと思う。

○委員

人材の育成について、ミライニに高校生が大勢きているが、そういう動きもうまく活用していくことが大事ではないかと思う。最近、コミュニティの行事等へ参加してみて、各地のコミセンなどでは、さまざまな活動が展開されていることを知った。どこでどんなことをしているかを把握して情報共有して、生かすことが活性化につながるのではないかと感じた。

○委員

体系図で、基本目標が基本方針の上にきたことで、より分かりやすくなつた。地域づくりでは、どれだけ参加しやすくなっているかがポイントだと思う。

鶴岡市でも酒田市でも商店街の活性化にも関わっているが、私たちの会社では、「SHONAI政経塾」という塾をしていて、政治でも経済でもまちのリーダー育成を目指している。もっとまちを活性化したい地域をよくしたいと考えている人もたくさんいるが、行政と手を組みたいと思っていてもなかなか手を組めないと感じているようだ。「人材を育む」というと行政が育てているようにも聞こえるが、もっと間口を広げてどんどん入れて、一緒にやっていくということが大事なのではないかと思う。もっとチャンスをどんどんつくっていくことが、人づくり、地域づくりにつながると思う。商店街では塩漬けになっているような所もあり、そういったものは行政の力が必要だ。やりたい人はたくさんいるので、入りやすい仕組みをつくっていくのが行政の役割かと思う。

○座長

生涯学習の理念は、「学びと活用」だが、学ぶことで充実感を持って、それを生かしていくことが大事だと、教育基本法第3条にある。その間をつなぐのが「つながる」で、「生かす」に行くための重要なセクションになる。「学ぶ、つながる、生かす」という構成は素晴らしい。

前回の会議で発言したが、「市民の心を豊かにする知の拠点図書館機能の拡充」の部分、図書館だけでつながっているとは思わない。中央公民館、公益大学もある。「知の拠点機能」でよいと思う。前回、「検討する」と回答があつたが、どんな検討をしたか。

○社会教育課長

「つながる」は、学びを通して地域社会や他者と交流を深めることを示している。図書館はその一つのハブになること、図書館機能を拡充することによって学びを支援できる、交流のきっかけになる、子どもたちが読書を通して将来に渡って探求心を培うことができることを示している。

○座長

図書館は、学ぶ活動のきっかけにはなるが、交流して「生かす」までする施設ではないと思う。「つながる」の幅を狭めているような気がする。「主な施策」に図書館はいいと思う。知の拠点は、公益大学が初めて使った言葉で、中央公民館も知の拠点となっている。そんな歴史があるので、「つながる」を狭く捉えなくてよいのではないか。この書きぶりでは、図書館以外ないと感じる。「主な施策」に「図書館」とあるので、図書館を中心にしていくことは分かる。ぜひ、検討してほしい。

○社会教育課長

酒田市教育振興基本計画に合わせた柱立てにしたので、図書館に寄った形になっている。基本方針の文言について、検討したい。

○委員

国と県のキーワードに、「持続可能」「ウェルビーイング」とある。酒田市の基本目標、基本方針をみると、「持続可能」は入っているが、「ウェルビーイング」が見えない。酒田市の社会教育として「ウェルビーイング」をどう捉えているか。また、酒田市の教育目標「学び合い ともに生きる 公益のまち酒田の人づくり」と、この基本目標との関連をどのように考えているか。

○社会教育課長

学びの中で一緒になった人たちと仲間になり、地域社会で活動する中で、課題を発見して、その課題解決への動きになり、持続可能な地域づくりへつながる。この学びの循環によって、安心して暮らせる、幸福感を得ていく、と考えている。「学ぶ、つながる、生かす」の循環がうまくいけば、ウェルビーイングへつながるという期待を込めている。

○座長

「ウェルビーイング」は、学校現場でも話題になっているか。

○委員

教職員や子どもたちの中では、「幸せ」と置き換えて、だれでも楽しく幸せに暮らせる学校をどうつくるか、と話題にしている。児童会や職員会議で、「今月はここがウェルビーイングとしてよかつた」などと、キーワードとして使っている。

○座長

「ウェルビーイング」は、子どもたちにも伝わっているか。

○委員

伝わっている。

○座長

中学校でも伝わっているか。

○委員

第四中学校では伝わっている。

○座長

県の計画をつくった職員へ「ウェルビーイングとは」聞くと「シンボル」とのこと。ウェルビーイングのために何をするかが大事だ。県は県で、市は市で定義していくべきと思う。以前は、「生きる力」が長く言われていた。その後に出てきたのが「ウェルビーイング」で、中身をどう定義するかが大事である。

○委員

「ウェルビーイング」は、マジックワードで、解釈が立場によって異なると感じる。ウェルビーイングの結果、地元を愛して、地元定着なのかな、と思うが、酒田市は酒田市のウェルビーイングを強く押し出してもよいと思う。

○座長

「ウェルビーイング」は、まだ流行語の段階かも知れないが、これからずっと続していくと思う。

## (2)酒田市子ども読書活動推進計画について

### ○委員

ミライニ(中央図書館)は交流を目的とした施設のため、紙の本が主体であると思うが、電子書籍の導入予定はあるか。

### ○事務局

電子書籍の導入について検討したが、費用の関係や交流拠点施設という施設の目的から断念した経過がある。県立図書館では電子書籍サービスを導入しており、県立図書館の利用登録をした方であれば誰でも利用できる。昨年、ミライニに県立図書館の職員が来て、県立図書館の利用登録を受け付けていた。山形市に行かなくても利用登録ができるため好評であり、今後も継続していただきたいと要望しているが、今年度は職員の手が空かず難しいとの回答をいただいている。

### ○委員

紙の本の貸出数や読書冊数ばかりにとらわれると、図書館運営は的外れになると思う。紙の本を読まないと不読率が上がるというのは的を射ていないと思う。鶴岡市のデータだが、小学生は不読率が低く、中学生・高校生になると次第に不読率が高くなっていく。高校生はすごく高くなる。

小学校は、学校が頑張って本を貸し出しているから不読率が低いこともあるし、読んでいなくても読んだことになるという見方もある。この数字にこだわるのはどうなのか。

酒田市の方針として、本を読ませることを目的にするよりは、読書によって、また図書館を活用してどんな子どもを育てたいのか、ということがあった方がいい。これがないと、ただ紙の本を読ませるだけになってしまふ。

### ○座長

「重点施策及び数値目標」の部分で、小学生は月10冊読んで、中学生は月に1冊も読んでいない。中学生は部活動があるのかも知れないが、差が極端である。この傾向は昔からあった。先日の新聞で見たが、全国の中学生で1冊も読まない人が52%だった。スマホが普及していることから、この先も減っていくのではないか。新聞を読む人も減っているが、新聞を読む子は学力が高いというデータもある。読書が減ると学力が落ちるのではないかと心配している。学校現場では、どうか。

### ○委員

低学年は、担任の先生が図書館へ連れて行って、クラス全員で借りる。

### ○委員

第六中学校へ年3回、読み聞かせに行っている。みんなが分かる内容のものを読んでいる。吉野弘の生誕100年なので、1学期は吉野さんの詩を読んで、今月も吉野さんの詩と絵本を読む。

ブックスタートの事業で絵本を配るのはいいが、絵本から本へ移行しない。字が読めるようになると、大人は「自分で読みなさい」となって、親子で本を共有しなくなる。子どもは、読んでもらって楽しむものだが、やっと字が読める位の子だと、自分で読んでも本を楽しむことはできない。情景を思い浮かべるとか、感情移入するのは難しい。アニメや動画へ行ってしまう。刺激が強いものが

あると、地味な読書へ行かなくなる。絵本から児童書へ移行するときは、親の手助けが必要だ。

先ほど意見があったように、冊数競争では読まないのでカウントされる場合もある。数ではなく、どんな絵本に出会えるか、何を得るかが重要だと思うので、そこへ大人が関わってほしい。

小学6年生位までは、親子で読む時間を共有してほしい。

○座長

冊数競争をしているから、反動で中学生になって読まなくなるのか。アンケートでは、読みたいと思っていても読めない、となっている。読む時間がないのか。学校で本を読んだ感想を発表するなどの機会がないと読まないのかと思う。

○委員

読書の目的は、楽しみやエンターテイメントの要素と、学びの要素がある。エンターテイメントについては、YouTube や TikTok に負けていて、大人もできないことを子どもにさせるのは難しい。では、学びの部分を本で調べるというのも、もはや違うと思っている。インターネットで正しい情報が得られるか、という問題はあるが、生成 AI では出典元までも分かる。本当に本で調べることをさせるのか。本ではこのように調べるという方法を教えるのはいいが、調べる時に生成 AI ではなく紙の本でするのは、考えなければならないと思う。

本好きな人が人生を豊かにするのはいいが、読書を教育と捉えるか、文化と捉えるか、大きく考えていかないと、不読率や貸出冊数の数字を追ってあまり意味がない。

目標指數を、定量的ものにしては意味がないが、酒田市として定性的な目標を持って、読書でどんな子を育てるのか、と考えてほしい。今は生成 AI は無視できないので、使ってほしいし、その上で考えてほしい。

○委員

今の時代の情報収集の手段は本だけではないのは分かるが、感情の盛り上がりは読書に及ばないと感じる。生成 AI も使っているが、ゆっくり浸りたい時は本を読むなど、場面によって自分で選択していくべきだと思う。

○委員

子どもの頃は、感想文を書かせられるので本はあまり好きではなかったが、共感できる文章にふれた時などは、本はいいと感じる。エンタメのツールが多くあるが、子どもは読み聞かせをしてもらうと、目をキラキラさせる。想像を膨らませ、人との触れ合いの幸せな時間を味わうこともできる。本も大事にしたい。

○委員

園では0歳から読み聞かせをしている。大きくなるにつれて、絵本だけではなく、素話や長編物語も取り入れることで、場面を頭でイメージするようになる。園では本を毎週2冊、家庭へ貸し出しているが、自分で選んだ好きな本を貸している。家庭では、平日帰宅後時間がない中、すきま時間で本に関わっている。本は、好き・嫌いではなく、共にあるものなので、読書離れということはない感じる。

スウェーデンに視察に行った際、デジタル化によって語彙が減ってきていて、これを危惧した国が言葉の教育を国の施策に入っていた。この傾向は、いずれ日本にもくるだろうと思う。図書館で

の貸し出し冊数の減少についての討議をされているが、読書でどんな子を育むのかが大事だと思う。

○委員

子ども読書活動推進計画と、これほど大上段に構えなければならないものなのか。その先にあるもの、人づくり、地域づくりが最終の目的になるかと思うが、読ませること自体が目的になっているような気がする。本好きな人が、人づくり・地域づくりを一生懸命にしている訳ではない。

○委員

本に慣れると読む速度が速くなり、多くの情報を得ることができる。やがて、学力や理解力にもつながる。早く読めるのがいい訳ではないが、読み慣れないと学力や理解力につながらない。本を読んで理解して想像を膨らませると、次の世界が見えてくる。そのお手伝いをしたいと考えている。

以上